

掛川市「生涯学習まちづくり」と地域社会の形成(2) —「とはなにか学舎」の講座システムの分析—

How the kakegawa City “Lifelong Learning Community Development” Movement Shaped the Local Community (2)

志 田 倫 子

1. 問題の所在

1. 1 研究の目的

静岡県掛川市は、昭和54（1979）年に市制25周年を記念して、全国に先駆けて「生涯学習都市宣言」を行い、当時の榛村純一市長率いる市行政の主導のもとで「生涯学習まちづくり」を積極的に推進していった。この掛川市生涯学習運動の展開と市民の活動は全国的にも注目され、ひとつの時代をつくったといえよう。しかしその展開過程に関する研究はあまりみられていない⁽¹⁾。

本研究⁽²⁾は、この「掛川市生涯学習」がいかに関係していったか、その展開の過程を、まちづくり、つまり地域社会の形成の観点からとらえていくことを目的としている。本稿ではその中盤にあたる時期⁽³⁾の分析を試みる。

本稿は、静岡県掛川市⁽⁴⁾の「生涯学習まちづくり」の中盤にあたる時期の特徴的な取り組みといえる市民向けの学習講座「とはなにか学舎」を取り上げる。この講座システム、言い換えるとカリキュラムの分析をとおして、この取り組みがコミュニティづくりの面でどのような意味をもっているのかを、生涯学習まちづくり運動の展開の過程の中でとらえていきたい。

1. 2 研究の意義と方法

ここで用いる「地域社会の形成」の意味を広義に定義すると、「市民、住民が主体となって、生活の場である地域社会の“魅力と住みよさ”をめざして、地域の課題や生活関心に取り組む協働の活動である」と規定したい。

発端としては、昭和44（1969）年に周知の報告書「コミュニティ生活の場における人間性の回復」が出されて以来、コミュニティという言葉が浸透して「コミュニティづくり」が国、地方自治体主導のもとで全国的に展開されてきた。

この「コミュニティづくり」に端を発した地域社会の形成は、今日に至るまで幾つの特徴の変化を辿っている。まず、多くが行政主導から民間主導へ主体を変えて展開している。また、施設整備重視のハード面から、活動、組織、グループワーク等のソフト面への推移、さらには住民の抱く地域課題や生活関心が変化していったことがあげられる。例えば、現在では、防災、高齢化、子育て、男女共同参画等のテーマや魅力ある地域づくりの問題が取り上げられている。情報活動の多様

化に伴い、広報やインターネットの活用等がみられる。

それと同時に特徴的なのは、グループ・仲間づくりの多様化である。現在でいうコミュニティづくりは、コミュニティの要件とされる「地域性」「共同性」のうち、「地域性」の持つ意味が希薄化している。すなわち、同じ目的をもった人が集まるアソシエーション型、さらにはネットワーク型の活動が中心で、いわゆるボランティア・アソシエーションが主流となっている。そこには、活動の目的意識の高さ、高機能化の傾向を見ることができるものの、土着の者がもつ、われわれ感情をもった仲間という安心感は喪失していることは否めない。

こうした現代社会、地域の現状において、「掛川市生涯学習まちづくり」は、掛川市が市をあげて取り組んだ掛川のための取り組みであり、行政主導でありながら、掛川市という包括的な「コミュニティ」の活性化のために行われた、いわゆる地域性を基盤とした土着型の活動であるといえる。松本（2005）によると、C.S.フィッシャー（1975）は下位文化理論の中で、都市度と下位文化の結びつきについて触れており、「地域が都市的であればあるほど、下位文化の強度は増大する」と述べている。このことは言い換えると、人口密度が低く、第一次産業が盛んな掛川市⁽⁵⁾は都市度が低い田舎のまちといえる。つまり、多くの下位文化を生成するようなアソシエーション型の結びつきは弱く、「地域性」「共同性」にもとづく全体的なまとまりのあるコミュニティ型の社会でその長所を発揮しやすいと考えられる。

そこで本研究では、こうした特徴ある取り組みを振り返ることで、「コミュニティ形成」の意味をもう一度確認してみたい。特に、当時、市長が強調して主導してきた遊び心のあふれた活動の中に、コミュニティ形成の楽しさ、いわゆる掛川市の特徴を確認することができる。また、いわゆるコミュニティ・ブームといわれる初期の1970年代から30年近くの長期にわたって推進されてきた「掛川市生涯学習運動」にみられる、多彩な密度の濃い取り組みがどのように展開して、市民、住民に影響してきたかを理解することは、今後の地域社会の形成にとって重要な意味をもつものといえよう。

研究の方法は、まず行政資料等の文献資料⁽⁶⁾、講座の関係者や講座の卒業生である「学士」へのインタビューをもとに「とはなにか学舎」の取り組みの内容を把握した。その上で分析を試みた。カリキュラムは平成14年（2002）年度のものを分析し、インタビューは講座の関係者や卒業生に対して、主に当時のことについて質問をした。このインタビューは主に2013年から2014年にかけて行った。

2. 市民向け学習講座「とはなにか学舎」と分析の方法

掛川市の取り組みはハード・ソフト面からの充実に特徴があるが、草創期の10年を過ぎて第2期ともいえる1990年代になると、取り組み自体が体系化され洗練されてくると同時に、ソフト面の充実、すなわち人づくりに力が入れるようになる。そのような中で、市民向け学習講座「とはなにか学舎」が開講される。本章では、この「とはなにか学舎」の講座のシステム、つまりカリキュ

ラムについて理解すると同時に、コミュニティづくりの面からの分析を試みたい。

2. 1 「とはなにか学舎」とは

まず、「とはなにか学舎」について紹介をしたい。生涯学習10ヵ年計画パートⅡの平成7（1995）年に、「地球掛川学研究所」が設立される。このもとで「とはなにか学舎」が開設する。「とはなにか学舎」とは、掛川市が実践してきた生涯学習運動の成果や、これまでの社会教育の各種の講座や諸々の事業の経験を踏まえて、体系化して客体化した成人向けの2年課程の単位制学習講座である。

「とはなにか学舎」の名称は、あらゆる学習課題に対して絶えず「なにか、なぜか」を問いかけ、問い続ける主体性と、その態度を学習する意図が込められている。

2. 2 「とはなにか学舎」と「講座のシステム」

次に、市民向け学習講座「とはなにか学舎」の「講座のシステム」すなわちカリキュラムはどのようなものなのか、概観していきたい。「とはなにか学舎」の学習は、第1年次のファーストステージと第2年次のセカンドステージの2年間にわたって行われて、その課程を終えて卒業すると「とはなにか学士」の称号が授与される。受講生は「学人（ガクト）」と呼ばれて卒業すると「学士（ガクシ）」と呼ばれる。

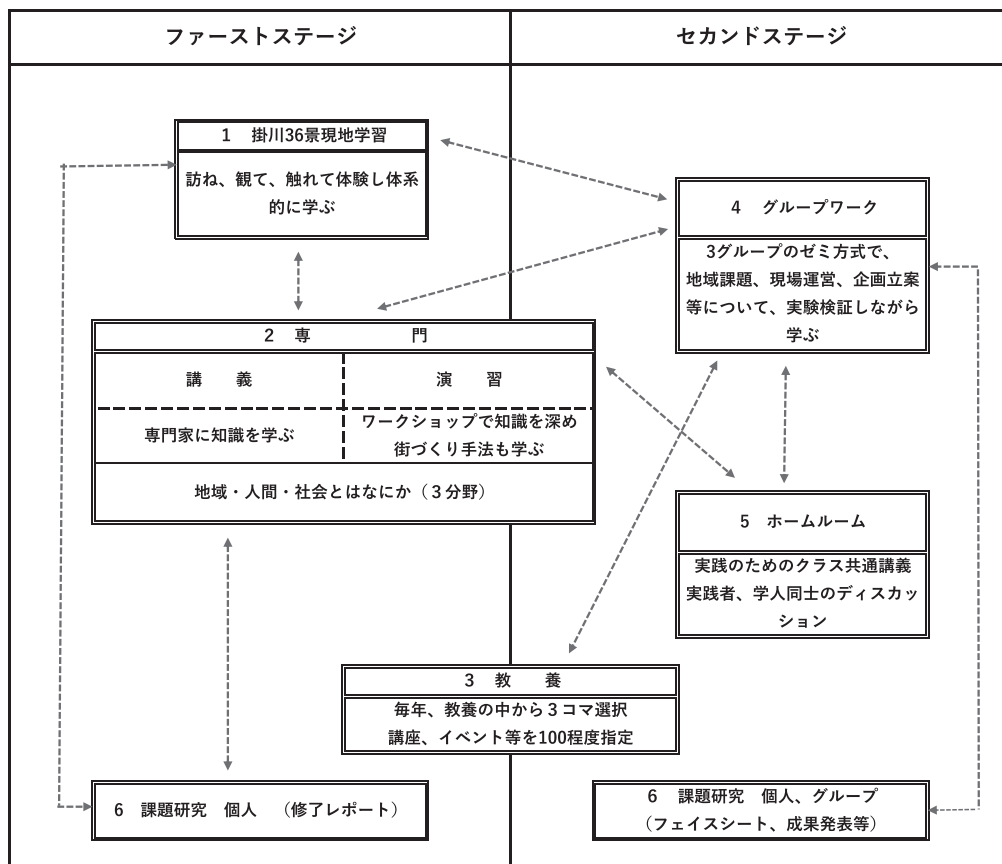


図1 「とはなにか学舎」の講座システム

学習課程は、ファーストステージでは現地実習の「掛川36景現地学習」、及び専門科目として「地域・人間・社会とはなにか」の3分野を各専門講師の指導のもとで学習する。この専門科目は講義で知識を身につけて、演習でワークショップにより街づくりの手法をも学ぶ。また、教養科目では、あらかじめ指定された市主催の講演会やシンポジウム、集会等に参加する。セカンドステージでは、ゼミ学習にあたるグループワークや、他ゼミとの交流を図るホームルームがある。さらに、課題研究としてファーストステージ修了時の修了レポート、セカンドステージ修了時の卒業レポートが課される。講座の科目間の相互の関係は図1が示すとおりである。

また、とはなにか学舎の受講生の定員は各学年36名、18歳以上の市民を中心に、市外の人も参加可能である。全体に占める市外の人の割合は、概ね2割程度とする。

学習の場である会場は、掛川市生涯学習センターを集会場として、さらに掛川36景を中心に掛川市全域はもちろんのこと、教材・講義内容によっては市外、県外など、さらには学習のフィールドを諸都市、外国にも広げて考えている。

各講座の講師の選任は、掛川市内に関連する講義・演習、例えば掛川36景についての学習等は、地域を理解する関係者や地元の企業関係者、行政関係者、その他学識経験者を講師に依頼する。専門科目（地域・人間・社会とはなにか）やグループワークは、それぞれ講義等の内容によって、専門分野の研究者を講師に依頼する。またグループワークでは助言者を置くこともできる。

「講座の企画運営」に当たっては、学舎の運営全体を総括する学長及び講座の内容を構成するコーディネーターを置く。さらに、社会と掛川の変化に対応して、講座の設定、内容、運営について協議するため、市内外の関係者、学識経験者による評議委員会及び企画運営委員を設置する。また受講料は1年間36,000円、この他掛川36景学びのバスの乗車料金は1回3,600円として、その他必要に応じ教材、材料費の実費を徴収する。榛村市長は生涯学習、「学舎」運営につねに「遊びどころ」の必要性を強調する。掛川36景とともに、入学定員、受講料、バス料金等「36」にこだわるところにも、市長のこのような意図が反映されている。

2. 3 分析の方法

本稿での分析の方法について説明したい。市民向け学習講座「とはなにか学舎」は、その講座を楽しみながら受けているうちに、主体的な取り組みの姿勢が身につき、地域づくりのリーダーになれるところに特徴がある。すなわち、地域づくりに必要なポイントが講座のシステム、言い換えるとカリキュラムの中に込められている。この講座のシステムを、コミュニティづくりの観点から分析したい。すなわち、コミュニティづくりに必要な条件としてあげられる諸点を整理して、それがいかにこの講座のシステムに組み込まれているのかを分析したい。

草創期における掛川市の取り組みは、独創的で膨大で圧倒されるものであった。その内容は、掛川市の生涯学習運動を特徴づけているものの、言い換えると体系的に行われたとは言い難く、全体像をとらえるのが難しかった。しかし、「とはなにか学舎」の講座のシステムは、それらの成果を踏まえた上で、体系化して、客体化されたものである。つまり、講座のシステムを分析することで、

いかにコミュニティづくりが掛川市で展開してきたのかを把握でき、コミュニティ形成の具体的方法を理解することができる。

以下、次のような方法で説明、分析を加えたい。まず、各科目の内容や、その中で行われる実践的な取り組みに個性があり特徴的なため、具体的な例を交えて紹介したい。そのうえで、各科目を次の2つの視点、「コミュニティづくりの条件と進め方」「コミュニティへの時代・社会の要請」の面から分析をしたい。

ここで分析の際に用いる2つの視点について解説を加えると、まず「コミュニティづくりの条件と進め方」を整理すると、次の5点にまとめることができる⁽⁷⁾。

- (1) 生活関心や地域課題をとらえ共有してテーマを決める。この際に、地域社会の特徴に目を向けたり、地域を歩いて危険箇所を見つけるなどのカルテづくりも有効である。
- (2) 仲間を募り、グループを育てる
- (3) 活動の場を確保し、活用する
- (4) 多様な情報の確保と活用につとめる
- (5) リーダーを見出し、リーダーになり、育てる

(1)～(4)は、コミュニティづくりの進め方になっており、(5)に関してはコミュニティづくりに必要な条件ともいえる。これらは、コミュニティづくりの手順として知られているが、個性あふれる「とはなにか学舎」の講座の中にどのような形で盛り込まれているか、分析を試みていきたい。

また、「(1) 生活関心や地域課題をとらえ共有してテーマを決める」際に、時代・社会が要請しているテーマを参考にして探すことも効果的であるとされる。そこで、テーマ設定へのヒントとされる「コミュニティへの時代・社会の要請」する8つのテーマが、いかに盛り込まれているのかも分析の視点としたい。この8つのテーマは、以下の内容である。

もちろん「生涯学習まちづくり」の取り組み全体は「(2) 余暇・生涯学習の推進―地域で学ぶ学習社会の実現―」にあたるものの、科目の中にもテーマ設定のヒントが含まれている。それについて分析を試みたい。

- (1) 青少年の健全育成―地域で育てる子どもたち―
- (2) 余暇・生涯学習の推進―地域で学ぶ学習社会の実現―
- (3) 高齢化社会への対応―高齢期の生きがいと健康づくり―
- (4) 地域産業の振興―地域産業に魅力と活力を―
- (5) 環境問題への取り組み―地球環境は地域環境から―
- (6) ふるさと志向の高揚―自然・景観・歴史・伝統への憧れ―
- (7) 国際化・国際交流の促進―国際化にむけての活動―
- (8) 防災・災害への対応―地域で守る住民生活―

また、科目が関連しあって講座を作り上げている点について注目し、科目間の関連性についても幾つかとりあげて説明を加えたい。

3. 講座のシステムの分析

本節では、講座の各科目の内容について理解した上で、「コミュニティづくりの条件と進め方」のどの部分にあたるのかについて分析を試みたい。つまり、各講座の科目は次のものから成り立っている。これらの「1. 掛川36景現地学習」「2. 専門科目（講義・演習）」「3. 教養科目」「4. グループワーク」「5. ホームルーム」がいかなるねらいのもとにあるのか、分析を試みたい。

3. 1 掛川36景現地学習

まず、講座の特徴的な取り組みである「掛川36景現地学習」をとりあげたい。

3. 1. 1 「掛川36景現地学習」とは

とはなにか学舎は、掛川市内に点在する「掛川36景」を学習素材として、それらの各々を実際に訪ね、見て、触れて体験して、その素材を体系的に学ぶことをとおして、まず掛川を理解して、愛する人を大勢つくることを目的としている。さらに全国的、国際的視野に立って掛川をとらえて、小都市の魅力を把握して、かつその将来像を描き、魅力ある地域づくりを主体的に実践する人間形成を意図している。

地域づくりにとって重要課題のひとつは、地域を理解してそこに魅力を感じて、愛着を抱き、さらに自らその地域の将来像を描いて、その実現に向けて実践する人材を育成することである。「掛川36景」の学習は、この課題を担い、かつそれに応える学習活動といえる。なお、「掛川36景」を素材とする地域づくりの実践は、セカンドステージにおける「4. グループワーク」と「6. 課題研究」でも展開されて、その研究の成果は年度ごとに発表して積み重ねられている。

ここで掛川36景⁽⁸⁾にあげられているものから、いくつか抜粋してみたい。例えば、天竜浜名湖鉄道、木造天守閣復元、さやの中山、資生堂アートハウス、特別老人ホーム「さやの家」、204茶工場、オレゴン生涯学習村、工業団地エコポリス、生涯学習センターなど、36の名所があげられている。この36景の中には、工業団地エコポリスや、復元した掛川城、生涯学習センターなど「生涯学習まちづくり」の中のハード面の整備によって整えられた施設が含まれている。こうした「生涯学習まちづくり」の成果である建物を「とはなにか学舎」の講座の中で見に行くことで、先達の偉業を知り、次世代につなげていく意味をももつ。

3. 1. 2 「掛川36景現地学習」の分析

この掛川36景現地学習は、どのような取り組みなのか、「コミュニティづくりの条件と進め方」の5点から分析を試みたい。

この内容は、「1 生活関心や地域課題をとらえ共有する」に該当する。すなわち、コミュニティづくりの際に、地域にどのような特徴や問題があるかを知り、安心・安全性、利便性、快適性の面を確認してカルテをつくり、何をテーマとして取り上げて、それをどうしたらよいかを考えていく

ためには、まず最初にその地域を見て歩くことが有効であるとされる。

「掛川36景現地学習」では、こうした目的のために見て歩くのに相応しい掛川市の特徴的な場所が、「掛川36景」として選ばれている。その36景を、「掛川36景学びのバス」に乗って、学士の皆で見学して歩くことで、地域の知識と地域課題を共有することができる。さらに、仲間と集いバスで名所を見学することで、地域社会に対する愛着や、仲間との一体感などをも得ることができる。

一方で、「コミュニティへの時代・社会の要請」の面から分析を試みたい。「掛川36景」に含まれている、「掛川城木造天守閣復元」、「さやの中山」に関しては、「自然・景観・歴史・伝統へ人が憧れをもち、ふるさと志向の高揚」が見られる中で、こうした「ふるさとづくり」を行っていくまちづくりの「テーマ設定」へのヒントが含まれている。つまり、「(6) ふるさと志向の高揚—自然・景観・歴史・伝統への憧れ—」について触れることができる。

同じように36景には「テーマ設定」をするために相応しい対象が含まれている。特別老人ホーム「さやの家」は、「高齢期の生きがいと健康づくりなど、高齢化社会に対応する」ことが学べるため「(3) 高齢化社会への対応—高齢期の生きがいと健康づくり—」を知ることができる。

「204茶工場」は204ある茶工場から「地域産業に魅力と活力を見出し、地域産業を振興する」ことが理解できるため「(4) 地域産業の振興—地域産業に魅力と活力を—」に意識を向けることができる。

アメリカ西部のオレゴン州にある「オレゴン生涯学習村」は、「国際化にむけての活動として国際化・国際交流の促進」をすることをねらいとしており「(7) 国際化・国際交流の促進—国際化にむけての活動—」を体験できる。

3. 2 「専門科目」

次に、講義と演習からなる「専門科目」について取り上げたい。

3. 2. 1 「専門科目」とは

専門科目は、「地域・人間・社会とはなにか」の3分野にわたって構成されており、各分野のテーマをファーストステージで月1回の講義（2時間）と月1回の同一テーマの演習（3.5時間）を組み合わせて学習する。セカンドステージでも専門科目を学習することができる。専門科目の各分野のテーマは、年度ごとに企画運営委員会で慎重に検討されて、つとめて各分野の現代的課題が取り上げられて、専門講師のもとでこれを学習する。

なお、専門演習のテーマは「講義」と「演習」をとおして地域社会の形成に求められる地域の課題や生活関心等に関連づけて、方向づけられて学習が進められる。この点が「学舎」の専門科目の学習の特徴といえよう。

例えば、平成14（2002）年度の専門科目の幾つかを取り上げてみると、「地域とはなにか」の分野では、テーマに「生涯学習と地域づくり」、「地域資源の活用」、「ハード、ソフトからみた地域づくり」、「21世紀の農業」等々と、直接「地域社会の形成」を現代的課題として学習する。また「人

間とはなにか」の分野では「少子高齢化」、「青少年問題」、「ボランティア・NPO」等のテーマが設定されて、これらの問題は地域づくりの必要性、地域で解決が求められる生活課題の方向で学習が展開されている。また「社会とはなにか」では、「これからの観光の意味」、「地球環境（生活と環境問題）」、「地方分権」、「国際関係（世界の中の日本）」等、現代社会の理解とともに、各テーマのもつ地域課題としての位置づけ、地域づくりの素材としてこれらを学習する。専門科目の分野全体をとおして、広く「地域社会の形成」の課題と方法を学習して、地域づくりの理解を深めていく。

3. 2. 2 「専門科目」の分析

「専門科目」は、「コミュニティづくりの条件とすすめ方」によると、「5 リーダーを見出し、リーダーになり、育てる」ことに該当する。すなわち「専門科目」によって、「地域・人間・社会」を理解して、時代の中でいかなる地域社会が求められるかを考えられるようになる。掛川土着の市民であっても、井の中の蛙とならず、リーダーに必要とされる「広い視野」を身につけて、まちづくりに取り組めることがねらいとされている。

3. 3 「教養科目」と体験学習

次に、体験学習としての「教養科目」について取り上げたい。

3. 3. 1 「教養科目」とは

「教養科目」は、市主催の100程度の講演会、シンポジウム、集会等のうち、あらかじめ指定されている催しから2年間にわたっていくつかを選択して、体験的に学習する。例えば、市主催のシンポジウム、市民総代会・地区集会・中央集会、教育後援会、図書館フェスティバル等々。

実に広範囲にわたる、多彩な「教養科目」を教材として体験学習を行うことで、教養的知識を習得するとともに、広く掛川市の生涯学習の意味と特徴を把握する。その過程で、市民、住民による「地域づくり」に求められる主体的な学習態度と活動の姿勢を学んでいく。

3. 3. 2 「教養科目」の特徴と分析

「教養科目」は、草創期から取り組んできた幅広い活動を活用するところに特徴がある。教養的知識を習得するとともに、掛川市の生涯学習の特徴を体験的に把握できる。さらに、他の市民が主体的に「地域づくり」に参画している姿に触れることができ、その過程で学人は「地域づくり」に求められる主体的な学習態度と活動の姿勢を学んでいく。

「コミュニティづくりの条件とすすめ方」のうち、「5 リーダーを見出し、リーダーになり、育てる」に該当する。「教養科目」は、リーダーに必要な幅広い視野を身につけることができ、さらに体験的な学習から主体的な活動姿勢、具体的な活動の仕方を学び身につけていくことができる。

3. 4 グループワークによる学習

続いて、セカンドステージの講座の中心にあるグループワークについてみていきたい。

3. 4. 1 「グループワーク」とは一都市・まちづくりの計画と実践の学習ー

グループワークはゼミ学習にあたる。1学年を3グループに分けて、各グループに講師が派遣されて、その指導のもとで「地域社会の形成の過程」を年間をとおして学習する。現代社会における地域社会の必要性、地域づくりの要件、課題の発見、グループづくり、具体的な実践活動等をゼミ単位で学習する。なお、1年間の学習の成果は卒業時に発表して、記録集として配布される。

例えば、平成14（2002）年度の各講師によるA～Cゼミの、ゼミ内容の紹介⁽⁹⁾をしたい（以下、ゼミ名：「テーマ」内容を記す）。

Aゼミ：「掛川・地域福祉の展開」高齢者・障がい者の誰もが、生涯にわたって、住み慣れた家庭と地域で安心して心地よく生活できる福祉環境（地域福祉）とは何か。掛川を舞台に、これをハード面、ソフト面から考えて展開する。

Bゼミ：「地域づくり実践（ソフトプラン・運営）」既にあるものに新しい価値をつける地域の再発見ソフトプランニング手法を学ぶ。あわせて、地域づくりの具体的な技術を身につけていく。

Cゼミ：「自然回帰型生活提案（ライフスタイル・プロデュース）」視点・着想・情報発信の基本を学びながら、地域の自然資源を取り入れた新しい生活の研究と実験を通して、環境時代の「豊かな地域流ライフスタイル」を提案する。

グループワークはゼミごとに展開の手法は異なるが、「地域社会の形成」を共通のベースに学習が進められる点は共通している。

3. 4. 2 「グループワーク」の分析

「コミュニティづくりの条件とすすめ方」から分析を加えると、「2 仲間を募り、グループを育てる」に該当する。「グループワーク」で各学年の受講生36名を3つのグループに均等にわけた場合、1グループ12人×3グループ＝36名となる。つまり、1グループ12名程度にグループ分けされて取り組みがなされる。

すなわち、この取り組みにはグループ分けが組み込まれており、そのグループでの1年間の活動を通して、グループを育てていくことになる。その過程で、グループ内におけるリーダー等の役割を遂行することで、グループに対して自分がすべき役割を自覚して、所属意識を強めていくことになる。

3. 4. 3 グループワークの活動例と分析

さらに、グループワークの具体的な活動例⁽¹⁰⁾について幾つか取り上げて分析を加えたい。以下、

(活動事例○：テーマ)、内容説明、分析の順に記す。活動事例1は他の科目との関連性について、活動事例2は「コミュニティづくりの条件とすすめ方」のどの部分にあたるかについて分析する。

(活動事例1：さやの中山、夜泣き石)

とあるゼミでは、「ふるさとづくり」を行っていくことがテーマとして取り上げられて、掛川市を魅力あるまちにするには、伝統文化を観光に結びつける取り組みをすることがゼミの方針として決まる。そこで「さやの中山」の夜泣き石の歴史を調べて、その仇討ちの物語を本にまとめる活動を行う。

「さやの中山」は掛川36景現地学習で見学しており、その時に感じた問題意識を深めてグループワークの活動につなげている。ファーストステージの特徴的な講座「1 掛川36景現地学習」をセカンドステージのゼミ学習である「グループワーク」に応用している。

(活動事例2：市民の憩いの場所として文化財を再現していこう)

また別のゼミでは、文化財を集会所として使えるように掃除をしようという取り組みが行われて、毎回掃除を行った。使用できるようになったときに、「月見の会」をその場所で行った。

この活動は、「コミュニティづくりの条件とすすめ方」の「3 活動の場所を確保し、活用する」に該当する。コミュニティ活動には場の確保が大切であり、そのための場さがし、場づくりもコミュニティ活動であるといわれてきたが、そうした内容に沿ったものとなっている。

3. 5 「ホームルーム」とその分析

「ホームルーム」の内容を概観して、分析を試みたい。「ホームルーム」は、ゼミ同士の交流である。普段は各ゼミの活動となるが、交流をすることで視野を広げることができる。こうした取り組みは、「コミュニティづくりの条件とすすめ方」の「4 多様な情報の確保と活用につとめる」に該当する。すなわち、各ゼミが交流することで情報交換の意味を持ち、互いのゼミから良い所を吸収して、自分のゼミに活かしていくことができる。

3. 6 まとめ

このように「とはなにか学舎」における学習は、個々の科目とともに講座全体の教育をとおして、地域づくりのリーダーを養成して、あわせて実践活動を展開してきたといえる。その特徴として、コミュニティ形成の流れを理解して、リーダーとして必要な幅広い視野などが自然と身につくような内容となっている。

これまで、それぞれの講座の内容を「コミュニティづくりの条件とすすめ方」の観点から分析してきたが、今一度その内容をまとめてみたい。矢印の先は、主に「とはなにか学舎」のどの科目に盛り込まれているかを示している。

- (1) 生活関心や地域課題をとらえ共有する ⇒掛川36景現地学習、グループワーク
- (2) 仲間を募り、グループを育てる ⇒グループワーク

- (3) 活動の場を確保し、活用する ⇒グループワーク（活動事例2）
- (4) 多様な情報の確保と活動につとめる ⇒ホームルーム
- (5) リーダーを見出し、リーダーになり、育てる ⇒専門科目、教養科目

また、「コミュニティへの時代・社会の要請」については、次のように分析できた。「生涯学習まちづくり」そのものは、「(2) 余暇・生涯学習の推進―地域で学ぶ学習社会の実現―」と一致するため、矢印の先にもそのように記した。その他については、主に「掛川36景現地学習」をとおして、これらのテーマが理解できるようになっていた。(2)を除いた矢印の先は、36景のどれを見学することで理解できるかを示している。

- (1) 青少年の健全育成―地域で育てる子どもたち―
- (2) 余暇・生涯学習の推進―地域で学ぶ学習社会の実現― ⇒「生涯学習まちづくり」全体
- (3) 高齢化社会への対応 ⇒特別老人ホーム「さやの家」
- (4) 地域産業の振興 ⇒「204茶工場」
- (5) 環境問題への取り組み
- (6) ふるさと志向の高揚 ⇒「木造天守閣復元」「さやの中山」
- (7) 国際化・国際交流の促進 ⇒「オレゴン生涯学習村」
- (8) 防災・災害への対応

4. おわりに

本稿は、生涯学習まちづくりの中盤にあたる時期に始まった「とはなにか学舎」の講座システムの分析を試みた。そして、この時期は、生涯学習まちづくり運動の展開の過程で、この講座により草創期からの取り組みが体系的にとらえられて、市民向けにコンパクトに提示することができた点の特徴として挙げるができる。また、講座を受けることで、例えば36景現地学習でまちづくりの過程で整備された建物などを見学するため、先達の偉業を知り、共同体としてのまとまりを維持する効果が期待できる。

しかし、本稿では主に講座の紹介とカリキュラムの分析にとどまり、地域特性の分析にまで至らなかった。掛川市のように土着型の包括的コミュニティが成り立つ地域特性、つまり産業や地域住民の年齢構成、居住年数などとの関連性についての実証的な研究は、今後の課題としたい。

注

(1) 掛川市生涯学習を紹介した報告書等はあるものの、コミュニティ形成の観点からの学術的な研究はあまりみられない

(2) 「掛川市生涯学習運動」の展開については、掛川市生涯学習部・人材企画課発行の資料、平成8（1996）年「生涯学習都市をめざして―掛川市の生涯学習運動―」を参考にした。掛川市生涯

学習運動は、榛村市長の在任中の昭和54（1979）年から平成17（2005）年まで続いた。任期中の施策は、パートⅠ、パートⅡ、パートⅢの時期にわけてとらえられている。生涯学習都市宣言の翌年の昭和55（1980）年から、その実践計画として生涯学習10ヵ年計画パートⅠがスタートして、その10年後の平成2（1990）年には、パートⅡがスタートした。そしてさらに10年後の平成12（2000）年にはパートⅢがスタートして、ハード、ソフト両面にわたり27年間生涯学習まちづくりが進められてきた。

「掛川市生涯学習」に関する本研究の構成について説明すると、「掛川市生涯学習の展開と地域社会の形成」をテーマに次の3部構成のもとに、その展開の過程を分析している。第1部は「パートⅠの草創期における掛川市生涯学習の構図」、第2部は「パートⅡにおける市民講座“とはなにか学舎”の講座システムの分析」、第3部は「掛川市生涯学習の今日的展開」である。第1部は、志田（2023）を参照のこと。本稿では、第2部にあたるパートⅡの分析を試みたい。第3部については、静岡県掛川市の資料、平成25（2013）年度「生涯学習社会の実現をめざして～掛川市の生涯学習まちづくり～」によると、パートⅢの途中で市長が変わったが、その後の市長のもとで榛村市長が推進した生涯学習の構造を基盤にして、行政を挙げて住民が主体となる「生涯学習まちづくり」の推進を図っているとのことである。この展開を第3部でとらえていきたい。

（3）「とはなにか学舎」が開講したのは榛村市長の在任期間のうちのパートⅡの時期であるため、本文では「中盤にあたる時期」と表現している。

（4）静岡県掛川市について概観したい。掛川市は静岡県の西部に位置し、静岡県の二大都市、静岡市と浜松市の中に位置している。県内で7番目に広い都市である。市町村合併が、2005年4月1日に行われて、掛川市とその南西部に位置した大須賀町、南東部に位置した大東町が合併して、現在の掛川市となる。市北部は山地であり、市南部には海が広がる。人口は118,022人で、県内9番目の人口規模の中都市である。人口密度は県内23市の中で19番目と低い。1世帯あたりの人数は平均2.9人であり、その人数は県内23市中5位である。

産業は、県内他市と比較すると、第一次産業就業者割合は23市中4位、第二次産業は5位、第三次産業は19位である。特徴的なのは、日本一の緑茶の生産、茶畑景観を形成していること。また、企業誘致により多くの有力企業が立地して、県内6位の製造品出荷額を持つ。

（平成22年国勢調査をもとに作成された掛川市HPから引用）

（5）掛川市の概要は、注（4）を参照のこと

（6）「とはなにか学舎」と「講座のシステム」については、『地球掛川学研究所「とはなにか学舎」開設要項』と「平成14（2002）年度 ファーストステージ―講義・演習（ワークショップ）の分野ごとのカリキュラム、セカンドステージ・カリキュラム（1．ホームルーム）（2．グループワーク）」を参照。

（7）コミュニティ形成の基本的な方法として、この「コミュニティづくりの条件とすすめ方」や「コミュニティへの時代・社会の要請」の8つのテーマは通常良く用いられる。例えば、伊藤光造・平田厚他（2007）などにも記載がある。

- (8) 掛川36景については、掛川市(2001)や、掛川市(2002)を参考にした。
- (9) 前掲の注(5)の「平成14(2002)年度 セカンドステージカリキュラム」から引用
- (10) 活動事例はインタビューによるもの

文献

- Fischer, C.S., 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism" American Journal of Sociology, 80, 1314-1319 (奥田・広田編訳1983『都市の理論のために』多賀出版)
- 伊藤光造・平田厚他2007『サアー始めよう コミュニティづくり』静岡県コミュニティづくり推進協議会
- 掛川市2001『36景 掛川市というテーマパークー生涯学習社会モデル、とはなにか学舎システムー』清文社
- 掛川市2002『とはなにか問答の楽しいまち 掛川36景 ー掛川市というテーマパークー』コンセプト創造屋工房
- 掛川市HP <https://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/> (2016年検索)
- 松本康2005「社会的ネットワークと下位文化」高橋勇悦監修『21世紀の都市社会学』pp.41-53 学文社
- 志田倫子2023「掛川市“生涯学習まちづくり”と地域社会の形成ー草創期の展開からー」『静岡英和学院大学紀要 第21号』pp.55-64 静岡英和学院大学

(付記)

本稿は、2014年度「社会教育学会」大会報告、2016年度「地域社会学会」大会報告の内容をもとに、加筆修正したものである。大会報告から時間が経ってしまったものの、本研究に興味をもって下さった方がおられて促されたのがきっかけで、この時期(2024年度)に論文の執筆に至った。

